

水を治めて天下を活かす —先人たちが遺した希望の糧—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

人々の暮らしに欠かせない水はときとして命を脅かす魔物と化します。昨年も記録的な集中豪雨や大型台風の襲来による水害が相次いで起こりました。震度7を観測した熊本地震では家屋の倒壊や土砂崩れによって尊い人命が失われ、大規模な断水被害で日常生活に重大な支障が生じました。

古来から水を制御する治水、そして水を資源として活用する利水は人間が生存するうえで死活的な課題となってきました。治水と利水に精魂を傾けてきた夥しい歴史の連なりによって現在の生活が成り立っているといっても過言ではありません。新年を迎え、試行錯誤を繰り返しながらも脈々と受け継がれてきた先人たちの苦闘に想いを馳せ、現代から未来へとつながる新たな希望の糧としていただけたら幸いです。

戦国武将の減災思想

米づくりを中心とする稲作農耕社会では古代から治水と利水が一体のものとして重視されてきました。弥生時代の遺跡として河川の氾濫から集落などを守る土手や排水路が発見されています。

8世紀初頭から始まる律令国家では河川水などを公共物として扱う公水主義が掲げられ、国家が洪水対策や農業用水などへの利用を進めました。しかし律令国家の衰退に連れて地方の豪族が台頭し、主導権は国家から各地域へ移行していきます。

地域的な治水・利水事業が本格化するのには戦国時代です。戦国武将は自然災害から領地内の農民

を守り、水田を開発して米を増産し、さらに領土を拡張して天下の覇者をめざすという野望を抱いていました。

なかでも史上最強の騎馬軍団を率いた武田信玄の信玄堤は有名です。天文10年(1541)、甲斐の国(山梨県)の領主となった若き信玄は甲府盆地で頻発する洪水を防ぐために約20年かけて工事を完成させました。釜無川と御勅使川の合流地点に築かれた信玄堤は洪水の際に決壊しないようにあらかじめ一部を低くして越流させ、水勢をできるだけ弱めるという工夫を特徴としています。

虎退治で知られる肥後の国(熊本県)の猛者・加藤清正も同様の発想で乗越堤を築造しました。溢れた水の勢いを削ぐために防水林として竹や松を植林しています。

彼らに共通しているのは洪水を封じ込めるのではなく洪水による水害を最小限にとどめるという減災の思想です。洪水が起こっても人間に影響を及ぼさなければ水害にはなりません。自然現象としての洪水は避けられなくても社会現象としての水害は人智を尽くして軽減することができます。こうした観点は江戸時代へと引き継がれました。

治山と治水を一体に

天正18年(1590)、天下を統一して江戸幕府を開いた徳川家康は関東平野の大改造を進めます。まず最初に着手したのは利根川の治水工事でした。技術的には減災を基調とする関東流(伊奈流)が

主流となります。堤防を高くせず、河川の幅を広くして緩やかに蛇行させ、越流する箇所には遊水地を設けました。

治水事業の発展に商人として貢献したのが河村瑞賢です。伊勢の国(三重県)の貧農の家に生まれた瑞賢は13歳で江戸に出て建設現場の資材を大八車で運搬する車力となります。長年にわたる稼ぎを元手に材木商に転じ、江戸の大半を焼き尽くす大火事となった「明暦の大火」で素早く木曾の材木を買い占め、復興工事が急増すると高値で売り捌いて巨万の富を手に入れました。

豪商として幕府の仕事も請け負うようになった瑞賢は年貢米を海上から運ぶ東廻り航路と西廻り航路の開拓を命じられます。近畿地方の河口付近の港では上流から流入する土砂でしばしば閉塞する事態が生じ、淀川河口の治水工事も任せられます。瑞賢は上流の治山と下流の治水を一体で整備すべきという考えに達し、水源林の涵養と河道の浚渫に打ち込みました。

江戸時代は建築用の木材需要が増大して森林の伐採が盛んに行われ、全国各地で豪雨による洪水や土砂災害が頻発していました。幕府は寛文6年(1666)、諸国山川浚を発して過剰な伐採の抑制と河川流域の造林を求めています。

岡山藩に仕えた陽明学者の熊沢蕃山は「山川は国の本なり」「木草しげき山は洪水の憂いなし。山に草木なければ洪水の憂いあり」と治山治水の思想を体系的に論じ、みずから工事を指導しました。しかし参勤交代や兵農分離など幕府の政策を容赦なく批判したことから、晩年は下総の国(茨城県)の古河城に蟄居謹慎を命じられます。のちに蕃山の思想は吉田松陰らに支持されて倒幕の礎となり、勝海舟から「儒服を着た英雄」と呼ばれました。

苦難を超えた使命感

治水と並んで不可欠だったのが飲料水の確保です。江戸は海岸に近い湿地帯を埋め立てた造成地です。地下水には塩分が含まれていて飲むことができません。家康は水道の整備を命じ、井の頭池、善福寺池、妙正寺池などを水源とする小石川上水が誕生しました。小石川上水は拡張されて神田上水となり、赤坂の溜池上水と共に活用されます。

ところが参勤交代制度で地方の大名や家臣が屋敷を構え、商業や農業が発達することによって爆発的に人口が増加していきます。江戸開府から約50年で人々は深刻な水不足に悩まされます。



東京都羽村市・玉川兄弟像

承応2年(1653)、第4代将軍である徳川家綱の時代に多摩川を水源とする玉川上水建設工事が始まりました。工事を請け負ったのが庄右衛門と清右衛門の玉川兄弟です。薩摩藩による苦難の治水工事を描いた歴史小説『孤愁の岸』で直木賞を受賞した杉本苑子の大作『玉川兄弟』で全国的に知られるようになりました。

承応2年(1653)、第4代将軍である徳川家綱の時代に多摩川を水源とする玉川上水建設工事が始まりました。工事を請け負ったのが庄右衛門と清右衛門の玉川兄弟です。薩摩藩による苦難の治水工事を描いた歴史小説『孤愁の岸』で直木賞を受賞した杉本苑子の大作『玉川兄弟』で全国的に知られるようになりました。

工事は当初から困難を極めます。最初は日野を取水口として用水路を掘り進んだところ水喰土によって地面に水が吸い込まれてしまいます。次は福生から取水しようとして硬い岩盤に阻まれます。

ラストチャンスというべき3度目の挑戦は羽村に白羽の矢を立てました。しかし高井戸まで掘り進んだところで幕府から与えられた工費6千両を使い果たしてしまいます。資金の追加を申し出たものの、完成するまでは自分で費用を工面しろと突っぱねられました。

兄弟は覚悟を固めます。小説『玉川兄弟』では「『家を売ろう』彼は言った。『日比屋の家をですか!』『兄さんの雑木山同様、これとても千両にはなるまい。地面は借地…。せいぜい三、四百両の値打ちしかないボロ家だが、少しはたしにできるだろうよ!』と清右衛門の決意が「家を売ろう」というひとことに象徴されています。

私財を投じた執念の工事は江戸の中心である四谷大木戸まで約43kmを8カ月かけて掘り進み、ついに完成にこぎつけます。玉川兄弟を支えたのは「水に飢えた江戸町民に水を送るのだ」という崇高な使命感にほかなりません。

ライフラインの本来の意味は命綱だそうです。まさしく水という命綱を握っている皆さまが新年も誇り高く仕事に励まれることを願っています。